

著：東 禹彦
爪—基礎から臨床まで 改訂第2版

書評者：山本 俊幸(福島県立医科大学皮膚科学講座)

本書は、爪診療の巨匠である東禹彦先生が2004年に執筆した「爪—基礎から臨床まで」を、今回十年ぶりに改訂されたものである。それに際し、僭越ながら書評を書かせていただく機会をいただいた。

いうまでもなく、著者の東先生は長年爪疾患をご自身のライフワークとされてこられた。本書は、爪の解剖学や生理学的なデータも網羅されており、辞典のようにしても長年重宝されてきた。今年の日本皮膚科学会総会の教育講演、爪の見方・治し方のセッションで総論を話された安木良博先生(前都立大塚病院皮膚科部長)にも、世界に誇る成書であると絶賛されていた。基礎的なデータとともに、ご自身の臨床経験から得られた膨大な臨床写真は、見るものに訴えかけてくる。また、本書を見ると、初めて聞く病名も多数あり、爪疾患の病名がこんなにもたくさんあるのかと感じさせられる。本書を通読するだけで、自分たちも爪の見方が一段階も二段階も向上したかのような錯覚さえ起こしてしまいそうである。

今回の改訂では、新しい病名、爪甲彎曲症の頻度や治療法、最近の話題(手足口病に罹患後の爪の脱落など)まで詳しく言及されている。最近の文献も網羅されており、著者が今なお、常にアンテナを張っておられることが伝わってくる。特に爪甲彎曲症は、日常診

療でしばしば見かけるものであり、その治療法は非常に参考になる。爪疾患全般にわたり治療法も詳しく書かれており、しかも特筆すべきは、ご自身でいろいろ工夫されたなかから、うまくいった例、いかなかった例を紹介してあることである。つまり、生きた経験としてわれわれに伝わってくるのであり、まさに臨床医の鑑である。

われわれの日常診療で爪の病変を主訴に来院する患者は多い。爪白癬だと、むしろ診断もやさしいし治療法もあるので楽である。しかし多くの皮膚科医にとって爪の見方は難しく、特に真菌症や炎症性角化症などの疾患に当てはまらない症例や、原因となりそうな内服歴もない場合、患者の納得のいくような説明も難しいし、治療も困ることが多い。また、爪の変化が起因するものは爪母の炎症なのか爪床の変化なのか、考えながら診察しているかと言われれば心もとない。加えて、爪は良い治療法がないからと、すぐにあきらめてしまう皮膚科医がなんと多いことか。ぜひ、本書をしっかりと読んでもらいたい。皮膚科のある施設はもちろんのこと、皮膚科医のいない施設でも必携の本である。

理想的には、目の前に起きている爪の変化から、ここにこのような症状が生じているからには、ここに原因(外力などの)があるからには違いない。それにはこうしたら

良くなるのでは、というような論理的な思考が組み立てられることで、そういう説明を受けると、患者も根気よく通院してくれるのだろう。そのような診療風景が目には浮かぶ。それができるようになるには、爪の解剖学的知識や生理的な機能を理解することが必要であることを改めて認識させられる。そのような達人の域にはとても達することはできないが、爪病変に強くなるには、せめて爪の垢でも煎じて飲まなければいけないかもしれない。

本書を拝読すると、一つのことをコツコツとやるのがいかに大事であるかということをつくづく感じさせられる。しかし、爪疾患の領域に限らず、先達のスペシャリストの大家が次第に退官されてしまうのは寂しい。たまに学会に出てこられた際に、後輩の皮膚科医が発表しているのを聞いてどう思われるのか、それを想像すると赤面の思いがする。若い皮膚科医を育成する身として、恥じないようにならなければ、と思う次第である。

最後に、本書を通じて若い皮膚科医が爪疾患にもっと興味を持ち、日常診療で必ず爪を見る習慣をつけていくことを望んでいる。

● A4 頁244 2016年6月
定価：本体14,000円＋税
[ISBN978-4-307-40054-1]
金原出版刊